

さざ波の下にあるもの

永田円了



Awakenings

世の中のごたごたをどう観るか。宗教学者・鈴木大拙は、「それは、それとして、...」と言った。世の中の雑多な出来事をさざ波に例えるなら、その荒れた水面から何メートルか下に潜ったところには、おそらく静かで心が和む世界があるに違いない。

水面の動きだけに囚われて世の中を見るなら、マインド（損得勘定が中心のエゴ）が仕切る世界を生きることになる。ガタガタした次元（さざ波）を超えた世界にリンクした時のみ、人は真に自らを生きることができるのではないか。

さざ波の下に何がある

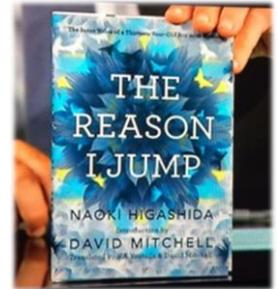
さざ波の下にあるものとは、本来の自分、命の正体、気づき、目覚め — コトバにするとこのように表現できるのだろう。人生の第一義的な目的は、外の世界には見つからない。内なる目的は、誠にシンプルなもの。それは、目覚めること。目覚めとは、意識の変化である。そして、その変化した意識の中で、マインド（エゴ中心の思考）と気づきが分離するのである。

「自閉症の僕が跳びはねる理由」

日本人の自閉症少年が書いた本が、いま世界中で読まれている。著者は東田直樹さん(22)、自閉症である自分の心の内を綴ったエッセイである。この本がアイルランドの作家、ディビッド・ミッチェルさんの目にとまり、翻訳され世界的なベストセラーになった。本のタイトルは、『The reason I jump』。

ミッチェルさんにも、重度の自閉症の息子がいる。息子とどう接したらいいのか、分からなく途方にくれているとき、ずっと探していた答えをこの本の中に見つけた。

自閉症は、状況の変化にうまく対応したり、対人関係を築くことが難しい脳の先天的機能障害と考えられている。自閉症をかかえる人は、アスペルガー症候群など軽度のものを含めると、100人に1人と言われる。一般的に自閉症は精神が破綻していると考えられている中、直樹さんの心のエッセイは、自閉症者への概念を覆すものであった。



不良品のロボットを運転



自閉症は精神が破綻しているのではなく、自分を伝えるコミュニケーションが上手いかわからないだけなのである。どうしてうまく会話ができませんか？との問いに「まるで不良品のロボットを運転しているようなもの」と直樹さんは言う。心は目の前の相手と友好的に接しようとするのに、身体が勝手に逆の方向へ動いてしまうのである。

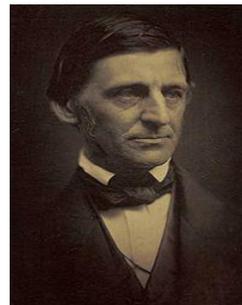
直樹さんの本によって、それまではその表面の行動のみを見て、その人を判断していたのが、表層の下にある心の存在にハッと気づかされたのである。

このプログラムを作りながら、自閉症をもつ方とどう接したらよいか、を学んだと同時に、健全者といわれる人たちに至っても、不良品のロボットは存在すると感じた。なぜ素直に自分を伝えられないのか。また相手のコトバを、文字通り自分勝手に解釈して、人にレッテルを貼っている自分がある。これを何とかしなければならぬ。

<事例 DVD>

鈴木大拙 「それは、それとして」 岡本美穂子語る
 自閉症の僕が跳びはねる理由 / 東田直樹 (22)
 The reason I jump 翻訳 by ディビッド・ミッチェル
 55歳からのハローライフ (2) ペットロス
 疾走するシェフ / イライラの厨房 in France
 狐野扶美子 料理プロデューサー / 中国の厨房で違いを発見
 Sting (63) / お金、名声、全てを手にした — そしてスランプ
 歌・Sting Dead Man's Boots 嫌で捨てた故郷と向き合う

円了のホームページ: www.enryo.jp



ラルフ・エマソン
米国の詩人・哲学者

人生の深みは、
 ただ長生きした、
 ということで
 辿りつくことはできない。
 幾度”Aha!”があったかで、
 決まる

Life is not measured by the number
 of breaths we take, but by the moments
 that take our breath away
 Ralph Emerson